

90%から60%

全国学力状況調査理科の結果が出た。

今回の中3が小6だった3年前、理科好きが90%で今回60%になり、その結果から理科離れが話題になった。

保護者も教員もわかると思うが、小学6年生と中学3年生では身体面・精神面で大きな変化（成長）がある。

小学生は、「読・書・話」だけでない体験が多い理科は楽しいと思う。また、そのような授業展開を求めているし、授業を行っている。

これに対して、中学生は小学生と同様に比較することは難しいかもしれない。

理科の学習内容も徐々に高度化し、数学の技能も必要となるため理科離れになるというネガティブな考えもあるだろうが、何より、様々なことへ興味関心が増え、理科以上に他のことへの興味が出て、相対的に理科は好きではないと評価する生徒もいるのでは無からうか。

実際、すでに理系文系という枠組みで創造・思考することが限界に近づきつつあり、真に伸びる人材は、自己の専門を柱に、文学、自然、芸術など総合的な力を持っている。

少々話が広がりすぎたので、現場に戻そう。

高学年に進むに従って、特に中学校で理科好きが減ることに関して考察する。

原因の一つとして振り返るが必要なこととして、

「理科の授業なのに観察実験という柱以外の活動が多くなっていないか？」

例えば、50分授業の半分以上観察実験に時間が必要なのに、実験前の予想・計画・観察実験の注意説明に多くの時間を取ってしまい、最も重要な観察実験が十分にできず何をしたかわからないまま時間が過ぎていくことはないだろうか。また、（まとめて自分の結果を発信する力の育成は大切だが）誰もがわかりきった結果でさらりと流して進めればいいことをじっくり話し合い発表する「形」を重視しすぎていないだろうか。

これらのことは早急に点検する必要がある、改善も可能であろう。

ただ、若干心配していることは、今回の結果が出ることで、「さあもっと子供が楽しいと感じる実験を取り入れよう！」の合い言葉で、やみくもに観察実験を盛り込み、十分な学びがないままに過ぎる授業にならないことである。

いつもいわれることだが、我々教職員、特に管理職と教育行政に関わる者は、バランス感覚と何が大切かを見極める力と態度が必要であろう。そして何より、「私は国語が大好きだけど理科も興味があるのよ」といえる生徒が増えることに期待したい。